

批評

## 武田俊輔著『commonsとしての都市祭礼—長浜曳山祭の都市社会学』 (新曜社 2019年)

片平深雪\*

同書は、伝統消費型都市（倉沢1968）で遂行される都市祭礼を対象に、地方都市にまだ残る「町内」社会の社会構造と社会ネットワーク、そしてその歴史的変容を明らかにする都市社会学的研究である。

対象となるのは、滋賀県長浜市の中心市街地を舞台に毎年4月に行われる「長浜曳山祭（以下、曳山祭）」だ。長浜は羽柴秀吉が商工業者を招致し開いた城下町であり、様々な職業を持つ家が集まって構成されている。そのため地縁組織として存在してきた「町内」は、村落のように生産活動を共同行為にせず、土木・衛生・教育・冠婚葬祭そして祭礼を共同で行ってきた。現在は国の重要無形文化財に指定され、ユネスコ無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」に登録されている。

そこで著者は、「町内」や「家」が共同で行いながら地域の社会関係をかたちづけてきた都市祭礼に着目し、それらを取り巻く環境が変化する中においてもなお「祭礼が継続している」ダイナミズムを検討する。

同書は3部10章で構成される。第1部（1章～3章）で課題の設定と分析視角が明確にされ、第2部（4章～8章）において実証的に記述されたのち、第3部（9章～10章）において結論が述べられる。

第1部では同書の課題と目的、曳山祭の概要を説明した上で、本研究が採用する3点の分析視角—全体的相互給付関係（有賀1967）、町内、commons論—が示される。

曳山祭は羽柴秀吉が長浜城主であった天正年間（1573-92）に長浜八幡宮の祭礼として始まったが、後にそれが「いかにお金を出して豪勢に執り行っているか」を町内や見物客に示す、町衆の威信をかけた豪華な祭りへと変貌していった。

その歴史背景は現代でも存分に引き継がれている。それを実感できるのが第2部だ。メンバーたちは年1度の祭礼のために、時に3カ月もの間、仕事もそっちのけで祭礼の準備に身を捧げる。そこでは老若男女を巻き込みながら、「家」や「町内」の威信をかけた真剣勝負が展開される。著者は例えば、荒っぽい神事が作り出す「喧嘩」とそれを適切に管理するための仕組み（第5章）や資金調達をめぐる若衆たちの意地の張り合い（第7章）など、人間くさいやりとりを臨場感そのままに、解像度高く描写する。

加えて第3部では史資料の整理がなされ（第9章）、最後に3点の分析視角に則った考察がされる（第10章）。

現在、社会学的地域研究領域は農村社会学、地域社会学、都市社会学などに細分化されている。それらは相互に影響し、また多くの隣接諸領域と関係しながら、研究領域の体系化が進められてきた。そこで著者は、各研究領域の分化以前に時間を巻き戻し、領域の差別化を図る際に置き去りにされた理論が、現代においても有効に働く分析視角であることを示そうとする。つまり、戦前から戦後にかけて農村社会学において蓄積された「集落的家連合」理論を現代の地方都市に適用することで「都市の中のくむら」の社会構造を明らかにし、都市社会学における新たな研究手法を提案することが、本研究の研究史上の意義であることが宣言される。

またもうひとつの意義として、都市祭礼を「commons」として捉え分析した点が示される。都市祭礼を扱う先行研究は、主に祭礼の社会統合機能に着目している。また日本語圏の自然資源をめぐるcommons論の議論では、里山管理など「調和的な共同性の中での資源管理」（256頁）が前提となる場合が多い。そのためcommons管理上のコン

\* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2019年度3年次転入学 公共領域

フリクトが前景となることは少なく、結果、アクターたちが管理ルールを創造するダイナミズムを描き出すことが難しい。著者はコンフリクトと共に、地域外のアクターとつながる社会的ネットワークも分析の射程に収めることで、都市祭礼研究の新たな回路を開こうとする。

都市社会学者でもあり、歴史社会学者でもある著者の視点で編まれた同書の中には、自身が長期間参与観察することで得られた豊かな語りやエピソードのみならず、一次資料の丹念な収集・分析も随所にちりばめられている。

その中から、第5章で描かれる「祭りで唯一若衆が主役となる場」(138頁)、「裸祭り」を見てみよう。裸祭りは、山組の若衆たちが組ごとに豊国神社から長浜八幡宮までの道を威勢よく練り歩く神事である。若衆たちは夜の寒さ凌ぎと称して会所で酒盛りを終えた後に出発し、道中で他の山組とすれ違う。喧嘩が起こるのはそんな時だ。「若衆たちの楽しみの中心は喧嘩」であり、中老たちもこれを黙認する。裸参りには「こちらから手を出さない」「境内などでの喧嘩は控える」などの最低限のルールがあるが、明文化はされていない。若衆たちは、ルールを守りつつも正当な理由「因縁」をつくり、あえて喧嘩を創り出していく。因縁となるのは、「あいつらはゆっくり歩いてきたからアーケードに入れたけど、その代りわしらは雨に濡れた」という3年前の出来事だけではなく、中老たちから聞いた20年前のエピソードも含まれる。そのような一発触発の中で筆頭や裸参り取締に求められるのは、よりよく喧嘩を演出し管理する能力である。そのために、喧嘩っ早い人物をマークして皆と情報共有する、本気で喧嘩を止める「ふり」をするなどの気配りがなされる。また見物人も、喧嘩を盛り上げるための重要な存在だ。例えば著者は、見物人が「火に油を注ぐ」ような話を伝播させることで山組同士の因縁が深まっていく様子を、マーソンの「予言の自己成就」を援用しながら説明する。ルールの余白について限界を見極め「因縁」という正統性を武器に喧嘩を仕掛ける出番山組たちは、まさにその「因縁」を互いに与え合いながら、「大きい喧嘩した」という勲章、つまり名誉や威信を見物人たちに示そうとする。著者はこれこそが「町内間における機会の贈与を通じた全体的相互給付関係」(156頁)だと位置づけ、この仕組みが祭礼を再生産し、管理していると結論付ける。

しかし一方でこの仕組みが揺らぎ始めている現況も、著者は同時に記述する(第10章)。若衆の人材不足が顕在化している近年、経験の少ない人物がその役を担う状況が生まれてきた。またそれに加え、飲み会の場を通じた記憶の継承が難しくなる状況下では、現場における個々人の高度な判断がしづらくなる。結果、新入りの若衆が「中老との間のコンフリクトを恐れて……『書いてあるのください』」というようにマニュアルを求める(272頁)事態も起こっているという。著者は「町内における関係性が大きく変わっていく可能性」にも言及し、論をとじる。

以上、本書の内容をみたうえで、評者は本書で触れられつつも、十分に議論が展開していない点として以下のふたつの論点があると考えた。

まず、都市祭礼に関わる微細な描写は主に男性たちを対象としており、著者は、自らが参与観察の射程外とした女性たちの世界にはあえて踏み込んでいないという点だ。ただ本書の記述からは、彼らと共に暮らす娘/母/妻たちがいかに「家」や「町内」、地域を生きているのか、という新たな問いが生み出される。

同書の中でも数少ない、女性が登場する場面を見てみよう。例えば子どもの多かった年に偶然あたり、自分の子が狂言の役者に選ばれなかった時に母親が「『なんでうちの子出さんのや』って言いに行きましたよ」(106頁)と恨み言をいう場面が記述される。女性たちも当然、祭礼をめぐる全体的相互給付関係に組み込まれている。しかし彼女たちは、「家」や「町内」の中だけで生きていくわけではない。特に女性たちにとっては、子どもを通じた学校社会も重要な位置を占めるだろう。著者の書く通り、男性たちが飲み会の席でこれまでのコンフリクトをネタにして「熟成」(127頁)させているのだとしたら、女性たちはコンフリクトをどのような場で扱っているのだろうか。

もうひとつは、今後、コモンズとしての祭礼が積極的に「活用する」ものとして捉え直された場合、所有者である「町内」の存在感がどう変容していくのかという点である。2019年4月に文化財保護法が改正され「保存から活用へ」と、文化財の位置づけも大きく舵が切られた。そしてこの改正により、これまで行政や所有者などに限られていた文化財活用のアクターのすそ野が、民間団体にまで広がった。

著者は本書において、メンバーの境界線を柔軟に変化させながらも「町内」というしくみを維持することで都市

祭礼が継続されているさまを描き出した。しかし「町内」の内部力学や存在感の変容は、構成員の変化だけで捉えることができないだろう。また、ひとりの人間の中でもそれらは状況によって変わりうる。人びとが場面ごと取る立場の変化—例えば「町内」の境界線の硬さや柔らかさの変化を鋭敏に感じ取ることで、「町内」が持つ可能性をさらに深く考察できるのではないか。今後は、「活用」が進む文化財保護の現場において、都市祭礼もより多様なアクターと社会的ネットワークを構築することになるだろう。その中においても「町内」は祭礼の継承に欠かせない装置となるのか。興味は尽きない。

しかしながらこれらの論点は、アクターたちの膨大なやりとりを元に著者が書きあげた分厚い記述があったからこそ、「想像の余地」があふりだしたものである。過去の歴史との連続性を切り捨てることなく、丁寧に地方都市の社会構造を追っていく本書の研究手法は、これからの地方都市研究のひとつの羅針盤となるだろう。

有賀喜左衛門, 1967, 『有賀喜左衛門著作集 3』 未来社.

倉沢進, 1968, 『日本の都市社会』 福村出版.

